死生論

小阪清行

はじめまして。「死生論」を担当する小阪です。

死生論と言っても、色々なアプローチがあるようで、医学、生命科学、生命倫理、哲学など、色々な人が、色々な立場から、色々なことを言っているようです。10年ほど前に、この授業を引き受けるにあたり、そんな本も少し囓ってみましたが、近頃はそんなことはどうでもいいと思うようになってきて、ここ数年は自分の言えることを、なるべく自分の言葉で言うしかないか、と思うようになってきました。

僕は45年近くドイツ語で飯を食ってきました。ですが三十年ほど前から、ドイツ語とか第二外国語なんて役に立たん、不要だ、という風潮が広がってきて、ドイツ語の授業が激減しました。すなわちドイツ語教師の仕事が減りました。それでは食べていけないだろうと思ってか、ある大学から比較文化論とか文学をやらんかと助け船を出されました。まあそれに近いことも勉強してきてはいたので、そんな授業も引き受けてきました。

しかし、十年近く前に医専の「死生論」の授業を引き受けないか、と言われたときは、即座にお断りしました。それなのに、なぜそれを撤回して引き受けたのか、それは秘密です。ちょっと恥ずかしくて言えません。「打ちあけるよりもむしろ死を選ぶ」ほどの秘密でもないのですが、まあ秘密にしておきましょう。

ドイツ語で口を糊してきたのですが、学生時代から「語学」を専門的に勉強してきた訳ではなくて、むしろ文学とか宗教みたいなことを中心に本を読んできました。

だもんですから、僕の話は、文学と宗教を中心に据えた「死生論」になります。「文学的に見た宗教みたいなもの」と言えば言えるかもしれません。僕にはそんな話しかできません。看護師を目指す皆さんはもっと実際的な知識、看護の現場で直接役立つものを、と思われるかもしれませんね。もしそうでしたら、期待外れということになります。ごめんなさい。でも「誰よりも十戒を守った君は 誰よりも十戒を破った君だ」なんて言った人がいます。人生はすべて逆説だらけ。そんな風に考えれば、一番無用なものが結局一番役立つんだ、なんてことも言えるかもしれませんよ。ですがまあ、こういう問題は押しつけることはできませんので、退屈でしたら、なんだったら好きな本でも読んでてください。

そもそもなんで僕が文学や宗教に興味を持ったか、って話から始めましょうか。きっかけはやはり「死」でした。中1の13歳のとき、4歳年上の兄が、高校の先生とその友人と3人で、年末から正月にかけて石鎚山に登って、ラッセルという雪掻き作業で、兄一人が体力を消耗して、凍死したのです。兄は僕と違って勉強家でしたから、ちょうど登山する前に期末試験があって、睡眠時間を削って勉強していた、と後で母から聞きました。初めての雪山登山を、どうしても止めさせるべきだったと、母は自分を激しく責め続けていました。性格のキツイ祖母からは、「おまえが跡取りを甘やかして、殺した」などと咎められて、家はしばらくは阿鼻地獄と化し、母の涙が絶えませんでした。

わが家は当時7人家族で、僕は末っ子。祖父は僕が生まれてすぐ亡くなったそうですから、物心がついて以来、死者を直に見るのは初めてのことでした。つい2日前まで同じ部屋の隣の布団で寝ていた兄が、真っ白い顔をしてお棺に入れられているのをのぞき込んだとき、僕自身も真っ白になり、アルコールの臭いのせいもあってか失神しそうになり、実際その場に倒れこんだことを覚えています。

その頃のことを思い出すといつも真っ先に「真空」という言葉が浮かぶのです。別の世界に迷い込んだみたいで、そこでは絶えず「キーーン」という音が耳を刺している、そんな張りつめた孤独な異空間でした。

僕は後に大学院で、リルケという詩人について勉強しました。彼が『オルフォイス、オイリュディケ、ヘルメス』という詩を書いています。リルケなんて詩人、名前も知らないという人もいるかもしれませんね。一応20世紀最大のドイツ語詩人の一人と言われていますけどね。そうですね、皆さんに身近な話としては、宮崎駿が『風立ちぬ』ってアニメを創っているでしょ？ あのタイトルは堀辰雄が書いた『風立ちぬ』という小説のタイトルそのままです。あのアニメの主人公は、堀越二郎という飛行機設計者と堀辰雄を「ごちゃまぜにした」と宮崎も言っていますが、その堀辰雄に一番大きな影響を与えた人間の一人がリルケです。

リルケは「死の詩人」と言われることがあります。宮崎のあのアニメの中でも、主人公の妻菜穂子が当時不治の病とされていた結核にかかっていたりして、死の粒子が漂っていたでしょ？

リルケの詩のタイトル『オルフォイス、オイリュディケ、ヘルメス』に出てくる三人の名前は、皆さんにはあまり馴染みがないでしょうが、ギリシア神話に出てくる人物です。ヘルメスは伝令神として比較的有名ですが、ここでの話にはあまり関係のない存在です。オルフォイスは吟遊詩人で、オイリュディケはその妻です。オルフォイスはリルケにとって、とても重要な存在で、晩年の代表作に『オルフォイスに寄せるソネット』という詩集があるほどです。さて、最愛の妻オイリュディケが毒蛇にかまれて死んだとき、オルフォイスは妻を取り戻すために冥府（死の世界ですが）に潜入します。妻を命の世界に連れ戻そうとする試みは結局失敗するのですが、その経緯もここでは直接関係してこないので、割愛します。

大切なのは、詩人オルフォイスによって歌われた、オイリュディケが感じた、美しくも張りつめた死の世界です。

資料集の3ページを開けてください。問題の詩の一節です。読んでみます。

あのように愛された彼女。そのために琴（リラ）から、
葬いの泣女の嘆きとは比較にならぬ嘆きが生まれた彼女。
嘆きから一つの世界が生まれ、その世界には、
一切のものがそっくりまた存在した――森や谷、
道や村落や、畑や川や獣など。

そしてこの嘆きの世界をめぐって、
ふしぎな形をした星々の輝く嘆きの天があった。

難しい詩ですが、というか詩というものは僕にとってほぼすべて難しいのですが、最後の二行が特に重要だと思います。「嘆きの世界」に「星々の輝く嘆きの天があった」とあります。僕にはなんだか「嘆き」は「美しい」と言っているように思えます。もっと言えば、「嘆きに満ちた美」が救いなんだ、と言っているようにも思えます。

そもそもなんでリルケのこの詩の話になったかと言えば、兄の死後、僕は「真空の世界」の中にいたと先ほど言いましたが、リルケを勉強し始めた頃、この詩を読んで、この「嘆きの世界」が、あの頃の張りつめた僕の心にとても似ていると感じたからです。

13 歳のガキとはいえ、その年頃の人間は、ある意味で一番純粋なのではないかと思います。恐らく凡庸な僕でも、「真空の世界」つまり「嘆きの世界」「悲嘆に満ちた美」には永遠性がある、と感じたのだろうと想像できます。

しかし悲しいかな、僕のような凡人は、一瞬そう感じることがあっても、すぐに雑事に紛れて忘れてしまいます。ところが、詩人と言われる優れた人間は、恐らく常時そういう世界に住んでいるのです。以下は、リルケとも交友のあったホフマンスタールという詩人の言葉です。「氷の冷たさに覆われた果てしない永遠の空間、そんな空気の中でも生きることのできる人間。やってくる何ものをも拒むことのできない魂。何千マイルも離れた場所で生じたほんの些細な振動をも、超敏感に感じとる地震計のような存在」 ― 詩人とはそんな人間だと言っています。リルケはまさにそんな詩人でした。

先ほど「美の永遠性」なんてことを申しましたが、ちょっと難しい話になってきました。もっと具体的に分かり易く話しましょうか。「美」と言えば、僕が必ず思い出すシーンがあるんです。ナチスの強制収容所での話です。

資料集の5ページを開けましょうか。フランクルという心理学者の書いた『夜と霧』という本からの引用です。フランクルはユダヤ人でした。ですから彼は、妻と両親と共に強制収容所に送られましたが、終戦まで生き延びたのはフランクルだけで、彼以外は全員が収容所で殺されています。

ちょっと長いですが読んでみます。

若干の囚人において現れる内面化の傾向は、機会さえあれば、芸術や自然に関する極めて強烈な体験にもなっていった。そしてその体験の強さは、われわれの環境とその全くすさまじい様子とを忘れさせることもできたのである。アウシュヴィッツからバイエルンの支所に鉄道輸送をされるとき、囚人運搬車の鉄格子の覗き窓から、ちょうど頂きが夕焼けに輝いているザルツブルクの山々を仰いでいるわれわれのうっとりと輝いている顔を誰かが見たとしたら、その人はそれが、いわばすでにその生涯を片づけられてしまっている人間の顔とは、決して信じ得なかったであろう。・・・・あるいは一度などは、われわれが労働で死んだように疲れ、スープ匙を手に持ったままバラックの土間にすでに横たわって

いた時、一人の仲間が飛び込んできて、極度の疲労や寒さにもかかわらず日没の光景を見逃させまいと、急いで外の点呼場まで来るようにと求めるのであった。

われわれはそれから外で、西方の暗く燃え上がる雲を眺め、また幻想的な形と青銅色からの真紅の色までのこの世ならぬ色彩とをもった様々な変化をする雲を見た。そしてその下にそれと対照的に収容所の荒涼とした灰色の掘立小屋と泥だらけの点呼場があり、その水溜まりにはまだ燃える空が映っていた。感動の沈黙が数分続いた後に、誰かが他の人に「世界ってどうしてこう綺麗なんだろう」と尋ねる声が聞えた。

日々奴隷として、汚い家畜のように扱われながら、地獄の住人として日を過ごしながら、世界を「綺麗」と感じること ― それは、恐らく世界（つまり人生）を肯定しているってことだと思います。ちなみに、『夜と霧』の原題は"… trotzdem Ja zum Leben sagen"と言いますが、直訳すると、「・・・にもかかわらず人生にイエスと言う」となります。もちろんイエスというのは、イエス・ノーのイエスですから、「現実がどうあろうとも、人生を肯定する」という意味になります。

知っている人もいるでしょうが、ゲーテが『ファウスト』という戯曲を書いています。二十代半ばに書き始めて、82 歳の死の直前に完成しましたから、60 年近い歳月をかけて書きあげたことになります。まさに畢生の大作です。

この『ファウスト』の出だし部分に、メフィストという悪魔が登場します。僕の経験からすれば、恐らく皆さんはゲーテやファウストは知らなくてもメフィストは知っているでしょう。マンガなんかにもよく出てくるようですね。

そのメフィストとファウストが契約を交わす場面があります。

メフィストはファウストに、美しさに感動して「時間よ止まれ！おまえは美しい」と言った瞬間、魂を自分に（すなわち悪魔に）引き渡すことを誓わせます。ちなみに「時間よ止まれ」っていうタイトルのポップな歌がいくつもあるようですね。これらは、もちろんファウストのこの言葉に由来するものでしょう。死生論を勉強すると流行（はやり）の歌についても造詣が深くなるって寸法です（笑）。

悪魔にとっては、人間が幸せであること、つまり人間がその生を肯定すること、これが一番我慢ならないんです。こう見てくると、やはり「美しい」と感じることは「生の肯定」なんでしょう。ゲーテが 60 年かけて書いた作品の中で、この言葉は、入口と出口のもっとも重要な場面で、二度使われています。ですから「生の肯定」こそ『ファウスト』の主題だった、と言って構わないでしょう。

どうして「美しい」と感じることが「生の肯定」に繋がるのか、不思議ですね。僕たちは（ごみごみした都会に住んでいようと、あるいはスイスのような美しい国に住んでいようと、そんな環境とは関係なく）われわれを取り巻く日常の世界に慣れていて、「美しい」と感動することはあまりありません。しかし、「美しい」と感動したとき、恐らくわれわれは「自我」とか「我欲」などという自己中心性から自由になっているんだろうと思います。「美」が、われわれの心を被う日常性という殻を打ち破って、忘れていた「本来の自

然性」へと解き放ってくれるのだろうと考えられます。

昔、ある文学の入門書に、こんな新聞記事が紹介されていました。トンネル工事の現場で大きな落盤事故が発生し、何十人もの作業員が閉じ込められたそうです。なかなか救助が来ず、何日も経ち、真っ暗な世界で、酸素もだんだん薄くなってきて、人々の不安が募ります。死の不安が極限に達し、精神的に異常をきたした人が叫び出したりして、現場全体がパニック状態に陥ります。そんな中、ある人が突然、昔自分が犯した罪について告白し出したそうです。それを聞いて、「俺もこんなことをやったことがある」「俺もだ」と、次々と懺悔し始めたそうです。すると不思議なことに、人々は平静を取り戻すことができた。死をも静かに受け入れる心の準備ができた ― そんな話でした。蛇足ながら、彼らは全員が救助されました。だからこそ、この話も記事として残ったのです。

これなども、「自我」からの解放と考えられるのではないでしょうか。すなわち、たいていの人間は誰しも、自分の悪や罪や恥を隠そうとします。それが積もり積もって、「自我の殻」となって、人間を自然性から引き離させる。ところが「告白」によって、その殻が破られ、永遠性のようなものとの繋がりが回復される。そう考えられるのではないでしょうか。

カトリックに「告解」という儀式があるそうです。懺悔のようなことをやるようですが、以前はそれに何の意味があるのか理解できませんでした。でもこの新聞記事を読んで以来、少し理解できたような気がしています。

ドストエフスキーの『罪と罰』の中で、金貸しの老婆を殺したラスコーリニコフが、純心の娼婦ソーニャに勧められて、広場で大地に跪いて自分の罪を告白する場面があるじゃないですか。あれも同じことでしょう。

いずれにしても、この自我の殻が破られるのは、たいてい死に直面した時とか、極限状態にあるような時です。結局、宗教や文学が問題とするのも、究極的にはそういう次元の話になります。

宗教というものには「胡散臭さ」がつきまといがちです。宗教は諸刃の剣ですから、毒にもなれば薬にもなります。逆に言えば、毒にならないようなものは、薬にもなりません。ともかく宗教は難しい問題を含んでいます。皆さんも愛しい人の死や、あるいは自分自身が死に直面するようなことがあった場合、初めて真剣に宗教と向き合うことになるのかもしれません。

さて、先ほど 3 ページで読んだリルケの詩の続きに、次のような一節があります。ここで「彼女」とは、もちろんオルフォイスの妻オイリュディケのことです。

そして彼女の「死者である」ことが
何か充実を意味するように彼女を充たしていた。
果実が甘さと、漠とした暗さとに充たされているように、
彼女は彼女の大きな死に、

彼女の理解を絶した新しい死に充たされていた。

「死の偉大さ」「死の充実」が歌われています。なるほどリルケが「死の詩人」だと言われるのも道理です。

これに対してゲーテは「生の詩人」と言われることがあります。このことに関して大学院時代に、リルケの専門の先生に、そのような捉え方をどう考えられるか質問したことがありました。「そう単純に色分けすることは無意味だ。リルケは『生の詩人』でもある。リルケにとっては『生と死は一つ』なのだから」、と言われたことをよく覚えています。

リルケの『ドゥイノの悲歌』という詩集は、彼の最高傑作とされています。リルケの詩の中でもとりわけ難しい詩で、僕も解説書を手元に置いて読もうと試みましたが、それでもよく分かりませんでした。この『悲歌』をポーランド語に訳した人がいます。彼がリルケに手紙を書いて「あなたがこの詩集の中で言いたかったことは、いったい何でしょうか」と質問しています。率直でいい質問ですよね（笑）。リルケはとても誠実な人間で、丁寧な返事を書いています。「私が表現したかったことは『生と死の肯定』です」と。

資料集の 10 ページを開けてください。道元の言葉です。ちなみに、仏教の方では生死（せいし）を生死（しょうじ）と読みます。

この生死（しょうじ）はすなわち仏の御いのちなり。これを厭（いと）い捨てんとすれば、即ち仏の御いのちを失わんとするなり。これにとどまりて、生死に著（執着）すれば、これも仏の御いのちを失うなり。厭（いと）ふことなく、したふことなき、このときはじめて仏のこころにいる。

「生きることも死ぬことも共に仏のいのち」である、つまり生と死は一つである、しかもそれが永遠の仏のいのちだ、というのです。リルケと同じようなことを言っていますね。仏教、特に禅の方の人は、よくリルケを引用しますが、根底で通じ合っているからでしょう。

僕がこの医専で「死生論」を担当するようになって、ほぼ 10 年になりますが、それ以前に担当されていたのは、八木洋一先生と仰るキリスト教学と宗教哲学の先生でした。授業を引き継ぐにあたって、「先生が死生論を講じるに際して、中核におかれていたのはどんなことですか」とお聞きしたことがありました。すると即座にたった一言、「生死すなわちこれ仏なり、ですよ」と。

凄みのある先生でした。よく、天からの何ものかに刺し貫かれている、というような印象を受けました。方向性は僕とは全く違っていましたが、僕がもっとも影響を受けた先生と言ってもいいかもしれません。僕が喋っていることも、ある意味で、ほとんど彼の考えの受け売りにすぎません。

ですが、リルケのような詩人や、八木先生のような宗教者が、その世界に「常住」しているのに対して、僕のような凡人、俗物は、瞬間的にその世界に触れることはあっても、すぐにその世界の外に出てしまうのです。仏教でいう煩悩、イエスの言葉で言えば「思い

煩い」に世界が濁されるのです。

例えば親鸞聖人なども、若い頃は随分この問題に悩まされたようです。人間、特に若い男性などは、性欲に苦しみます。もちろん僕もそうでしたし、後期高齢者に一歩手前の今でも、そこからまだまだ完全に自由ではありません。全くイヤになります。

で、親鸞は 29 歳の頃、それまで厳しい修行を重ねてきた比叡山を下りて、京の町中にある六角堂という寺に約百日間籠もります。そのとき、夢の中に救世菩薩が現れて、次のように告げます。12 ページを見てください。

行者宿報女犯設けば　我玉女と成りて身犯されん　一生之間能荘厳して　臨終に引導し極楽に生ぜしめん

現代語訳では「**もしあなたが宿命によって女犯の罪を犯すならば、私が美しい女人となってその相手となりましょう。そして一生あなたと添い遂げて、命終わるときには必ず極楽へ導きましょう**」となるようです。

ムンムンしてますね。親鸞の強烈な性欲を感じてしまうのですが、皆さんはどうでしょうか。はっきり申して、僕は禅的世界からは遠い人間だと自覚しています。むしろ親鸞のこういう人間臭さに惹かれるのです。彼は自分の心を『和讃』の中でこんな風にも歌っています。

悪性（あくしょう）さらにやめがたし　こころは蛇蠍（じゃかつ）のごとくなり
（私は本来の悪性を根絶できない。心は蛇や蠍（さそり）のように悪辣である。）

僕は常々、宗教的人間には二つのタイプがあるんじゃないか、と思っています。一方に、リルケや道元のような、透徹した一つの世界に貫かれた詩人タイプ。もう一方には、自身の悪との格闘に喘ぎ、かつ藻掻きながら、ドロドロした生を生きる親鸞のような小説家タイプ。

後者の作家の例として、トルストイや遠藤周作を挙げることができると思います。僕は遠藤の作品が好きで、よく読むんですが、皆さんが生まれたときには、もう死んでいた小説家ですから、名前も知らない、なんて人もいるかもしれませんね。でも 5 ～ 6 年前に、江戸時代初期のキリシタン迫害を扱った『沈黙 ― サイレンス ― 』という映画が話題になったので、観た人もいるでしょう。監督のスコセッシは遠藤に直接会って、映画化の許可を得ていたようです。小説『沈黙』を「数えきれないほど読み直して」、遠藤との約束を実現するまで 30 年近くかけた作品です。さすがとてもよく出来た作品だと思います。でも、観た人の感想のほとんどが「残酷な拷問シーンが強烈だった」というものでした。そんな感想はさておき、映画というものは、せいぜい 2 時間半くらいの勝負ですから、遠藤の言いたかったことを表現するのは時間的に難しかった面もあるでしょうし、そもそも宗教的内面性を映像で表現すること自体に無理があるのかもしれません。

僕の考えでは、遠藤の言いたかったことは、親鸞の言葉で言えば、「摂取不捨」ということだと思います。「摂取不捨」とは、「阿弥陀仏はすべての存在を無条件に救い取り（摂取)、何者をも捨てない（不捨)」という意味です。

この「摂取不捨」がここでの本題なのですが、その前にちょっと長い前置きがあります。「摂取不捨」には後で戻ることにします。

前置きの、そのまた前に、『沈黙』を読んだことも、映画も観たことがない人のために、この小説のあらすじについて知っておいてもらう必要があります。

主人公は、ロドリゴという若いポルトガル人宣教師です。尊敬する恩師のフェレイラが、拷問にあって棄教します。「穴吊り」とか「逆さ磔」と呼ばれる最も苛酷な拷問でした。逆さにぶら下げられて、そのままだと早く死んでしまうので、耳の後ろに小さな穴が開けられます。少しずつ血を流すことによって、苦痛が長続きするのです。しかも、ぶら下がった頭の下には穴が掘られていて、そこには糞尿が入れられています。痛さ、苦しさだけでなく、臭気によって心理的な惨めさも加えられます。

フェレイラは約 5 時間の「穴吊り」の後、棄教しました。この 5 時間という数字が生々しいですね。このあたりは史実なので、史料も残っているようです。恐らく頭は朦朧として、意識もまともな状態ではなかったでしょう。

棄教することを当時、「転ぶ」と言っていましたが、転んだフェレイラを再びキリスト教に改宗させるため、かつての弟子であるロドリゴとガルペが二人で日本に潜入します。やがて彼らも密告によって信者たちと一緒に捕縛され、棄教を迫られますが、当然拒絶します。厳しい拷問を覚悟していたものの、案に反して拷問を受けるのは、日本人の信者たちのみ。宗門改役の井上筑後守は、ロドリゴが転びさえすれば、信者たちを助けてやると唆します。ロドリゴは、フェレイラの説得もあり、苦悩の末についに踏み絵を踏みます。棄教したロドリゴは何十年も日本で生きつづけ、日本人妻、日本人名を押し付けられ、江戸のキリシタン屋敷で病没します。そんな物語です。

作中のフェレイラと井上筑後守は実在の人物ですが、ロドリゴやガルペは遠藤が創作した架空の人物です。しかし遠藤はロドリゴを造形するにあたって、ジュゼッペ・キアラというシチリア島出身の実在の人物をモデルにしています。つい最近、「『沈黙』の歴史的背景」と題して人前で話す機会があったので、その辺のことをちょこちょこ調べてみました。小説『沈黙』では、フェレイラに再改宗を説くため、かつての弟子であるロドリゴとガルペの二人が日本に潜入するという筋になっていますが、歴史的事実としては 3 回の試みがあって、総勢 19 人が潜入しました。1 回目（1 人）と 2 回目（8 人）の試みでは、全員が棄教を拒んで殉教しています。3 回目にやって来た 10 人の一人がキアラでした。この 10 人は、なんと全員が棄教します。井上筑後守の狡猾な策略に引っかかったと言われています。ちなみに筑後守は、彼自身がかつてはキリシタンだったとの説があるそうで、だからこそ彼は、キリシタンたちの心理が深く読めたのだろう、と考えられています。

実在の人物キアラが棄教後、転んだままだったのか、あるいはキリスト教信仰に回帰したのか、実際のところは分かりません。もちろん日記の類が残っているわけでもありませ

んしね。ただ、彼は 72 歳のとき（死の約 10 年前ですが）、幕府から『天主教大意』（あるいは『キリシタン宗門の書』）なる本を書かされました。原本は現在、行方不明になっているようですが、新井白石が「最後の潜入バテレン」であるシドッチを尋問する際、キリスト教の教義について予備知識を得るため、キアラのこの書を読んだ上で、シドッチと西洋思想について議論を交わしています。ですから白石の『西洋紀聞』には断片的にではあるけれども、キアラの文章が引用されており、そこからある程度キアラの信仰について推察はできるようです。『天主教大意』著述後に信仰復帰を疑われたという事実もあり、また寺の檀家になることを拒絶したそうですから、キリスト教に回帰した可能性はなくはないでしょう。

実際、信仰への復帰をはっきり表明したバテレンもおりました。キアラと一緒に日本にやってきた神父の一人アロヨです。彼は、棄教後にキリスト教信仰に立ち帰ると公言し、そのため女牢に押し込められ、そこで絶食して 20 日ほどで衰弱死しています。ですがキアラの場合は、はっきりした意志表示がありません。

さて、本題に戻りましょう。ロドリゴのモデル、キアラの棄教後の信仰がどうであったのか、それはこの際、関係ありません。キアラについての話はいわば雑談のようなものでした。

ですが遠藤が、当時ほとんど知られていなかったキアラという実在の転びバテレンについての情報を得たとき、遠藤が何を感じ、どう考えたか、これはとても重要です。キアラに関する史料がほとんど残されていないことで、却って遠藤の想像力は掻き立てられたようです。遠藤はキアラの名前を、ロドリゴに変えますが、これも恐らくは、史実から離れることによって、より自由に想像の翼を広げるためだったでしょう。

遠藤はロドリゴを棄教者とは描いていません。確かにロドリゴは「踏み絵」を踏みます。しかし、それは神あるいはイエスに促されて踏むのです。狡猾な井上筑後守は、ロドリゴ自身を穴吊りの拷問にかけることはしませんでしたが、もし仮に穴吊りにされ、フェレイラと同様に真実「棄教」していたとしても、神の側にはいささかの変化もありません。人間が神を裏切っても、神を捨てても、「神が人間を捨てない」 ― 遠藤の言いたかったことは、ただこれ一つです。遠藤のこの考え方は、キリスト教本来の教えとは違っているので、『沈黙』が出版された頃は、キリスト教徒たる者はこんな本は読むべきでない、と教えられていたそうです。異端と見なされていたんですね。実際、僕が昔、偶然足を踏み入れたあるプロテスタントの教会でも、威勢のいい牧師さんがやはりそんな説教をされていました。

『沈黙』の主人公は間違いなくロドリゴです。しかし、僕の考えでは、裏の主人公（あるいは真の主人公）は密告者キチジローとフェレイラではないかと思うのです。キチジローは、何度も踏み絵を踏んで、かつ仲間のキリシタンを裏切ります。司祭であるロドリゴをも裏切ります。意志薄弱でかつ卑怯な裏切り者、そんな人間としてキチジローは描かれています。それでも、何度も何度も彼は神に、そしてロドリゴに、赦しを請うのです。赦しを請うたあと、また裏切るんです。そんなキチジローをも、『沈黙』の神は、すなわち

遠藤の神は、赦します。これが「摂取不捨」だと僕は思っています。

遠藤の代表作と言われるものの一つに『死海のほとり』という作品があります。この作品に「ねずみ」と呼ばれるユダヤ系ポーランド人の修道士が登場します。貧弱でみすぼらしく、卑怯な人間で、誰からも疎んじられ、そんな彼がなぜ修道士なのか理解に苦しむような存在。要するに、キチジローにそっくりな人間。遠藤の作品によく登場するタイプの人間です。遠藤は恐らく自分の人格の一部を彼らに投影しているのでしょう。

人間には生まれつき、邪悪な者、弱い者、ひねくれた者がいます。もちろんどんな境遇に生まれても、どんな親に育てられても、どれほど能力が無くても、そこから立派な人間に成長すべきなのは当然です。しかし、どれほど努力しても、変わらないものはいつまで経っても変わらないという側面もあります。努力そのものができない人間だっているかもしれません。仏教ではこういう人間を「下根の凡夫」と言います。

遠藤においては、そういう人間も神の愛の対象です。あるいは「そういう人間こそ！」と言っていいかもしれません。

遠藤はカトリック教徒ですが、彼はキリスト教の神をそのように捉えています。親鸞の阿弥陀仏に似ていると思いますが、あるいはひょっとすると親鸞からの影響もあるかもしれません。でも僕は遠藤の「体質」だろうと考えています。彼は幼い頃からずっと、キチジローやねずみのような自分の心の屈折を見つめ続けてきたのです。彼の自伝的小説やエッセイを読んでいると、それがよく分かります。

僕自身も、詩人や真の宗教者のような「上根」の人間からは遙かに遠い存在だと自覚しています。ただ、キチジローやねずみのように、そして遠藤のように、何かにすがりつきたい気持ちだけはあります。遠藤に惹かれるのは、きっと、自分に極めて近いものを感じているからでしょう。

今から 4 年前のことです。悪性リンパ腫という病気で入院したことがあります。3 週間ほどで退院はできたのですが、月に 1 ～ 2 回、通院しながら抗がん剤を打ちました。看護師の卵である皆さんは、もちろんご存じでしょうが、抗がん剤には癌細胞を壊す働きがあります。しかし同時に健康維持に必要な白血球なども壊してしまいます。当然、病原菌に対する抵抗力が落ちてきます。そんなある日、酷い下痢と嘔吐に襲われました。1 日で 30 回もトイレに行きました。急性胃腸炎だと言われて再入院し、下痢が止まるまで約 10 日間、一滴の水も飲めません。もちろん水分なしで人間は生きていけませんから、ほぼ 24 時間点滴で水分を補給する訳です。体力がガタッと落ちて、トイレに行くのも杖をついたり、壁に手をついたりして、フラフラしながら歩いていきます。高熱のため、その 10 日間は、頭も朦朧としておりました。

それでも読みたい本がありました。遠藤周作の『イエスの生涯』です。13 ページを開いてみましょうか。長い引用ですが、読んでみます。

幸いなるかな　心貧しき人
天国は彼等のものなればなり

幸いなるかな　泣く人
彼等は慰められるべければなり

有名なイエスのこの言葉の背後には、宝石のように、愛の神のイメージがきらめいています。しかし、（イエスの故郷である）ナザレの町で彼が見たのは、貧しい者はいつまでも不幸であり、泣く人がけっして慰められないような現実です。彼が（苦行した）ユダの荒野（あらの）で仰いだ星々も、氷のように冷たく、生きるものの何ひとつない死海とその背後の山々は、怒る神、罰する神、裁く神しか暗示していませんでした。旧約聖書の世界が抱きつづけた、このあまりにも厳格な父なる神のイメージ。

だが、「神の愛」とか「愛の神」を口で語るのはやさしいことです。苛酷な現実に生きる人間は、はるかに冷たい神の沈黙しか感じません。苛酷な現実から愛の神を信ずるよりは、怒りの神とか罰する神を考えるほうがはるかにやさしいものです。だから、旧約聖書の中で、時には神の愛が語られていても、人々の心には、怖れの対象となる神のイメージのほうが強かったわけです。心貧しい人や泣く人には、現実では何の報いもないように見える時、神の愛をどのようにしてつかめるというのでしょうか。

イエスはもちろん、この矛盾に気づいていました。彼の心には、神の愛に対する信仰が燃えていましたが、しかしそれは、この矛盾を無視していたわけではありません。いや、むしろ、イエスの生涯を貫くもっとも大きなテーマは、愛の神の存在をわれわれにどのように証明し、神の愛をどのように知らせるかにかかっていたわけでしょう。

実はこれは『イエスの生涯』ではなく、『私のイエス』という本からの引用です。ほぼ同じことが書かれていますが、後者の方が、より易しく、一般向きなので、こちらから引用しました。僕が病院で読もうとした『イエスの生涯』は、キリスト教をあまり知らない人には少し難し過ぎるかと思って、『私のイエス』から引用したわけです。

身体がしんどいとき、そして心も苦しいとき、そんな時、もちろん薬や看護してくれる人の温かい助けはありがたいのですが、たった一ページの文章、たった一つの文、たった一つの単語が、それよりももっともっと大きな慰めや光を与えてくれることがあることを、体感しました。

もちろんキチジローもねずみも、そのことを知っていたのです。ですからキリスト教（神）から離れられなかったのでしょう。転んで、キリシタン目明しにまで身を持ち崩し、幕府に仕えたフェレイラも、（彼が自覚していたかどうかは別にして）光に包まれていたのではないでしょうか。

フェレイラとほぼ同時期に捕まり、一緒に拷問された 8 人の中に、有名な日本人司祭がいました。中浦ジュリアンです。そんな人知らないという人もいるでしょうが、天正遣欧少年使節の 4 人の少年の一人で、ローマでは教皇にも拝謁しています。ジュリアンは、家康によるキリシタン国外追放令の後も、国内にとどまってキリシタンの信仰生活を支えていたのですが、捕縛当時 65 歳で当時としてはすでに高齢で、かつ病弱でした。彼は逆さ磔にされて殉教しましたが、最後に「この大きな苦しみは神の愛のため」という言葉を残

して死んでいったと伝えられています。

その 8 人のうち､熱烈な信仰者として尊敬を集めていたフェレイラだけが棄教しました。ジュリアンをはじめ、仲間たちがみんな殉教していく中で、自分一人が棄教し、その後 17 年間、転びバテレンとして、キリシタン目明しとして生きていく日々。しかも自分を再改宗させるため 19 人もの仲間が波濤万里をものともせず来航し、ある者たちは自分の目の前で殉教し、また他の者たちについては、彼らを棄教させるための卑劣な策略に手を貸す ― 想像を絶する苦悩だったろうと考えられます。あるいは自分の苦悩に耐えかねて、自暴自棄になってサディスティックに仲間を苦しめる。そんな自分をまた咎めかつ苛む虚無的存在。

フェレイラが捕縛されたのは 1633 年ですから、彼は幕府の禁教令が出た後、西洋人ゆえに風貌がとびっきり目立つにもかかわらず、約 20 年も潜伏していたことになります。聖者のごとく迫害に耐えた、筋金入りの宣教師でした。日本人キリシタンたちから尊敬されていただけでなく、イエズス会からも全幅の信頼を得ていた。だからこそ、ポルトガルやマカオから、19 人もの人間が彼のために、文字通り命を懸けて、日本への潜入を繰り返したのです。

そんな自分の過去を思い出したとき、彼の苦悩の闇は一層深まったに違いありません。ひょっとすると、一番苦しんだのは、殉教者たちや、キアラのような転びキリシタンたちよりも、むしろフェレイラ自身だったかもしれません。

明治初期にレオン・パジェスというフランスの日本史研究家がいたそうです。彼が『日本切支丹宗門史』という本を書いていて、その中でフェレイラに関して、フェレイラは死の直前にキリスト教に立ち帰った、と書いているそうですが、これもキアラの場合と同様、あまり信憑性のある話ではなさそうです。穿った考えかもしれませんが、「最後の最後にキリスト教に立ち帰った」という事実を捏造（？）したくなるほど、この研究家にとっても、フェレイラの一生はあまりに痛ましく、悲劇的に感じられたのではないでしょうか。

遠藤の作品の中では、そんなフェレイラにも、キチジローにも、そしてもちろんロドリゴ（キアラ）にも、光があたっているように感じられます。僕がそう感じるだけでなく、間違いなくそれが遠藤の真意でした。なぜなら遠藤のイエスは、ユダにさえ「私はおまえの苦しみのために存在しているのだ」と語りかけるのですから。

以上が「摂取不捨」の意味でした。『沈黙』で遠藤が言いたかったことでした。

最後に、なぜ遠藤は、『沈黙』のような小説を書くに至ったのかを考えてみたいと思います。

実は僕も、ときどき小説もどきを書くことがあるのですが、取るに足らない僕の経験から言っても、何か背中を押すものがなければ、なかなか書けないものなのです。

遠藤は、三十代後半に、肺結核で三回大きな手術を受けています。その際、肋骨 7 本と片肺を失っています。

結核の特効薬ストレプトマイシンはすでに存在したようですが、日本では入手が極めて

困難で、昭和 30 年代までは、病巣である肺の切除が一般的だったようです。

歴史小説家・吉村昭もやはり肺結核で、肋骨 5 本と片肺を切りとられています。彼が講演でそんなことを喋っているのを、CD で聴いたことがあるんです。いちおう麻酔をかけてやったらしいですが、神経が切断されて、ものすごい激痛が走ったそうです。この手術を受ける患者たちのほとんどが、泣きわめいて、「やめろ」とか「殺せ～」とか叫ぶんだとか。

遠藤が手術を受けたのは、吉村よりも 10 年以上後ですから、医療技術も多少は向上していたかもしれません。それでも立て続けに三回の手術、しかも肋骨が 7 本ですから、まさに拷問だったに違いありません。三回目の手術の最中に、心臓が一時停止したものの、奇跡的に命は取り留めたようです。

「拷問はそれ自身よりも、それを待っている時のほうが辛い。手術だって同じことだ」と書いた遠藤は、手術の度に、死の恐怖に怯えていたに違いありません。この時期に彼は一枚の踏み絵を見たことをきっかけとして､キリシタン関係の本を濫読していたようです。きっと手術（＝拷問）を前にして、踏み絵を踏んだ弱者たちに想いを馳せていたのでしょう。

遠藤の死後、順子夫人がインタヴューに答えてこんなことを言っています。（踏み絵を見て夫周作は）「･･･生きてこれを書きたいとものすごく思った。恐らくそのエネルギーで長年の宿敵であった結核を克服できたんだと思います」。

資料の 15 ページを開けてもらいましょうか。遠藤は殉教者たちを強者、転んだキリシタンたちを弱者と呼んでいます。

弱者たちもまた我々と同じ人間なのだ。彼等がそれまで自分の理想としていたものを、この世でもっとも善く、美しいと思っていたものを裏切った時、泪を流さなかったとどうして言えよう。後悔と恥とで身を震わせなかったとどうして言えよう。その悲しみや苦しみにたいして小説家である私は無関心ではいられなかった。彼等が転んだあとも、ひたすら歪んだ指をあわせ、言葉にならぬ祈りを唱えたとすれば、私の頬にも泪が流れるのである。

この泪が、遠藤の背中を押した、そして『沈黙』を書かしめた、 ― そう言えるのではないでしょうか。

では、今日はこの辺で。